

2019年8月2日～4日

津賀ダム平和祈念碑 10周年・日韓交流 報告集



編集 幡多高校生ゼミナール
編集協力 津賀ダム平和祈念碑10周年・実行委員会

目次

I. 日程

1. 日韓交流

韓国 8人(女高生4人、OB女1人、男教員2人、女教員1人)

日本23人(女高生7人、男高生1人、OB5人、顧問5人、地域5人)

8月2日(金)

13:24 韓国の方を出迎え(中村駅) 昼食→ 宿毛湾で釣り体験

17:00~幡多ゼミナール館で交流:調理、夕食、チマ・チョゴリ、花火(幡多ゼミナール館泊)

8月3日(土)

8:30 ゼミ館出発 → 10:00 窪川駅集合 → 窪川庁舎見学 → 移動(マイクロバスと車)

→スタジオ556:徴用工家族・鈴木(李)さんの聞き取り調査 → 集成材工場見学 →

移動(昼食:大正道の駅) → 下道集会所:木工(ベンチ組み立て、デザイン塗装、
鳥の巣箱作成・取り付け) …17:00 夕食(担当:村井まなさん他) ソーメン流し、花火

(下道集会所泊)

2. 津賀ダム平和祈念碑10周年記念式典

8月4日(日)

8:00 朝食、9:30 徒歩で → 10:00~11:00 津賀ダム平和祈念碑10周年式典(現地実

行委員会主催) → 移動(マイクロバスと車)(昼食:大正道の駅) → 四万十川沈下橋(上岡)

・自然体験 → 14:02 窪川駅出発:韓国の方とのお別れ

II. 徴用工家族の聞き取り:鈴木(李)さん

III. 津賀ダム平和祈念碑10周年記念式典

IV. 感想文

V. 資料

1. メッセージ

「徴用工問題解決に向け、今こそ民間交流を広げよう」 幡多高校生ゼミナール顧問会

2. 新聞記事

①「韓国高校生と友好誓う」津賀ダム慰霊碑建立10年 高知新聞

②「日韓の若者らが交流」高知・津賀ダム建設の犠牲 朝鮮人犠牲者を追悼 赤旗

③「徴用工に慰霊の献花」釜山の高校生も参加 高知民報

④「反日」「韓国との平和、友好ちかう」 高知新聞

⑤「四国 津賀ダム強制徴用工犠牲者追悼10年『平和の礎を位置づける』」

韓国 news 1 コリア (韓国通信社)

⑥「日韓 今こそ平和の祈り」読売新聞

⑦「津賀ダム朝鮮人『名簿』発見」昭和19年の旧大正村資料 高知新聞 2005

⑧「朝鮮人労働の記録確認」韓国側へ申請手助け 朝日新聞 2008

VI. 編集後記(お礼に代えて)

コメントの追加 [橋平1]:

I. 日程

1. 日韓交流

8月2日（金）

釣り

JR 中村駅で、韓国の皆さんを幡多ゼミ全員が迎え、ゼミ館で荷物を降ろし休憩した。その後、宿毛湾へ移動、魚を釣る段取り。まず、浜辺で波が打ち寄せるたびに、キャッキヤ騒ぎながら互いの名前を教え合い、覚え合い、活発なコミュニケーション。出会いの不安は吹き飛んでいる様子。



岸壁で釣りが始まった。多くは初体験、先生たちに餌を付けてもらい、釣れる度にキャッキヤ、キャッキヤ、獲物と一緒に記念撮影、そして日韓交流が。炎天下、熱中症を物ともせず、釣った、釣った、2時間近くも。



料理・夕食

大漁のゴンズイやベラ、中には親ビッチャもいる。何辺が小さい、どう料理するか、難しい。小刀で、器用に鱗を剥がし3枚におろす坂下先生に生徒が群れる。教え上手で、高校生もすぐできるようになった。

そして、大きなタタキ用の焼き器に魚をのせ、ドラム缶のワラに火をつけた。薫焼きタタキの



カツオならず、ベラとゴンズイ。面白そうに高校生は焼くが、炭になりそう。結局、翌朝の味噌汁の出汁になる。

そうこうしているうちに、幡多ゼミOBの料理が完成。皿鉢寿司に刺身、揚げ物、サラダ、贅沢にもモイカとアユの塩焼きも。大ご馳走に歓声が上がる。日韓交流に関わってきた田中前四万十市長ご夫妻、宿毛協会の牧田牧師に東ご夫妻、浦木秀雄さんが加わって、高校生も大人も盛り上がる。

チマ・チョゴリ

お腹が落ち着くと、高校生はゼミ館2階へ。そこには「渡り川」の時代、在日の方から寄贈されたチマ・チョゴリがある。韓国高校生が日本の高校生に着付けをしてくれ、カメラのフラッシュが光る。記念撮影が延々と続く。



8月3日（土）

四万十町舎見学

車に分乗し窪川へ。地域の方々と合流し、まず四万十町舎を見学。ヒノキの香りが漂う舎内を林課長、山本局長に案内してもらう。町長室で記念撮影し、窪川駅をまたぐ回廊を渡る。議会場に入

ると、幡多ゼミOBで町議の村井真菜さんの席にゼミ生がチャッカリ座り、議員になった素振り。そのお茶目さが木の温もりもあっていい。

鈴木（李）さん証言

その後、山本局長が運転してくれる町のマイクロバスに日韓高校生と教員が乗せてもらう。まず、山本先生経営のギャラリー喫茶 556 へ。鈴木(李)さんが待っていてくれ、父親の強制連行と戦後の厳しい差別と生活について証言してくれた。

（詳細はⅡ. 徴用工家族の聞き取りを参照）



集成材工場見学

高校生の合唱が起こるマイクロバスは大正集成材工場へ向かう。韓国は高層マンションが多いため子どもがシックハウス症になりやすく、「ヒノキブーム」で室内材利用が求められている。日韓交流の今後のテーマとなることから、この工場見学が企画された。



廣田工場長が見学と集成材の説明をしてくれた。平成元年、端材や間伐材を活用しようと四国でいち早く操業を開始、コクヨと提携し商品を開発してきた。四万十ヒノキの木肌が映える椅子やテーブルから何とも言えぬ良い香りが匂う。四万十町、四万十市、中土佐町、三原村は「全国屈指

のヒノキ一大産地」となる時代がそこまで来ている。

木工：下道集会所



大正道の駅で食事を取り、マイクロバスで下道集会所へ移動する。集成材工場で購入した集成材でベンチを作る。寸法を合わせ材を切り、釘を打つ。岡花親子がコンビプレーで手際よく作業を進め、全体を引っ張っていく。女子高生は村井さんが用意してくれた材を組み合わせ、釘を打ち鳥の巣箱を作る。

しかし、真っ直ぐ釘を打つのは想像以上に難しい。案の定、釘を抜いて打ち直したり、釘先が突き出てベソをかく。上手に打てると拍手喝采が起こる。

2人座りのベンチができると、ペインティング。さあ、何を描くか？ ペンキで手形を押そうとなり、色とりどりの11の手形が完成していく。「愛」「平和と愛」「ありがとう」「又会えるのが楽しみだよ」「日韓高校作 2019. 8. 4」ハングル表記もある。自分の名前書いた人も。ベンチは明日の記念式典で披露し、普段はこの集会所に置くことに。巣箱の一つは集会所そばの木に、もう一つは津賀ダム平和祈念碑近くの木に固定した。



プレゼント交換

一息つくと、日韓高校生は一部屋に集まった。プレゼント交換だ。日本高校生は帰宅するので、お別れだ、最後の交流となる。プレゼントを交換し、涙ぐみ、ハグし合う。一緒に歌を歌い、写真を撮る。再会を約束し日本の高校生は帰っていった。



ソーメン流し、夕食

地元の方が割った竹をたくさん持ってきてくれた。流しソーメンだ！ 坂のアプローチの手すりに竹をくくり付け、準備完了。ソーメンが流れると大歓声！ すくっても、すくっても、うまく採れない。難しい。坂下氏がニマツと笑い、ここが一番と場末のバケツからソーメンをすくう。ホンマここがいいと今城氏もバケツへ走る。

ソーメンが茹で上がる間に、並ぶ順番を決めることになった。高いところほどゲットできる。ジャンケン、ポン！ 相子でしょ！ 熱い戦いだ。大人げない、高校生に譲らんか！ 何と優勝者は上岡氏、ピースサインでソーメンを大食。何ということ、お客の韓国高校生に譲らんか！



さて、夕食は、幡多ゼミOBの村井真菜さんとお友だちが準備し、作ってくれる。その間、韓国

の方々がプールに飛び込む。ゴッツイ気持ちよさそう。シャワーの代わりに也成为りそう。

しかし、突然、真菜さんの子どもが頭を打って、検査のためご夫婦で病院へ連れて行った。後で、真菜さんのお母さんが何でもなかったと教えてくれたので、みんな安堵。

夕食は柚子を利かした田舎寿司、猪肉のトマト煮、先ほど紹介した流しソーメン、サラダにたこ焼きなど。地域の食材をふんだんに使った郷土料理のご馳走。美味しかった。



2. 津賀ダム平和祈念碑10周年記念式典

8月4日（日）

朝食をすまし、後片づけ掃除を済ませる。津賀ダム平和祈念碑まで歩いて行くと、既に多くの人々が来て準備をしてくれている。町職員や地域の方々は会場をきれいに清掃、テントを張りイスやテーブルを並べ、花を飾って下さる。いつものことだが頭が下がる。

また中村や高知など遠方から多くの人々が来ている。大韓国民団やコリアン協会の方々も。皆さんに挨拶し、自分たちの準備をする。四万十町の国際交流員キム・ヘミンさんが通訳してくれるので心強い。まもなく式典だ。

津賀ダム平和祈念碑10周年式典

（式典あいさつは Ⅲ. 津賀ダム平和祈念碑10周年式典を参照）

式典は実行委員長・山本氏の開式のあいさつで始まり、来賓の皆様からそれぞれあいさつをいただいた。その中で、日韓関係悪化でも式典を実行できたことや韓国から高校生、教員を招待し高校生日韓交流を実現できたことは大きな成果、とい

うことが浮き彫りになった。

最も盛り上がった場面を記録する。笛によるアリランの演奏（民団）をBGMに、一人ずつ献花し犠牲者の慰霊と日韓友好、平和を祈る。笛の音が祈念碑の周り、木々やダム湖面に広がり参加者の心に染み込んでいく。



ついで、韓国高校生がアリランを歌い踊った。何でも伝統的なアリランと最新K-ポップをリミックスした防弾少年団の歌だという。引率のペ先生によると「10年前は犠牲者の悲しみと供養の思いが主だったが、もう10年経ちました。元気の出る『アリラン』を生徒と考えました。」なるほどと納得させられる。さすが、ペ先生。

幡多ゼミOBで現四万十町議会議員の村井真菜さんの閉式のあいさつで式典を終えた。

参加者は約60名、酷暑の中よく集まってくれました。ホントにありがとう！

四万十川交流、お別れ

大正道の駅で弁当を食べ、マイクロバスで四万十川へ。上岡の沈下橋で最後の交流をした。地元の人か観光客か、川に足をつけて遊ぶ人がある。アユの友釣りをしている人もいる。いいですね。四万十川の原風景が気持ちを落ち着かせてくれる。

沈下橋の上から、式典で使った花をちぎって川に流し、慰霊の手を合わせる。



あっという間に時間は過ぎ、マイクロバスで窪川駅へ。いよいよ別れだ。日本側からお土産として四万十ヒノキで作ったまな板と鉛筆を贈る。

高校生の時日韓交流に参加し、今は新聞記者として活躍するチョ・アヒョンさんが日本の一人一人と2ショット写真を撮って回る。韓国高校生も全員と握手して名残を惜しんだ。

また、会いましょう！



Ⅱ. 徴用工家族・鈴木（李）さんの証言

私は、鈴木洋一（李^イ洋一）と言います。

私の父は強制連行で日本へ連れてこられました。津賀ダムという所で、愛媛のアルミ工場へ送る電気を作るダムですね。そこでトンネルを掘りました。アルミは何に使うかというと、戦争中なので飛行機を造ります。アルミニウムがいります。ダムを造って、電気を起こして、愛媛へ送る。そうすると、工場で電気を使ってアルミニウムを製錬します。



建設中の津賀ダム

戦争当時、日本で一番怖かった特高、特別高等警察、それによって全部監視されているので、自由に行動とかものが言えません。父親はそこのトンネルで働いていました。200名くらいの朝鮮人が連れてこられていたそうです。津賀ダムから発電所まで600mのトンネルです。水を流して発電するので、急こう配のトンネルです。トンネルの工事はもの凄く難工事で、死者がたくさん出たそうです。先生方が幡多ゼミの生徒を連れて調査して、朝鮮人の無名墓を捜しました。埋葬された遺骨の上に石が置かれています。

私の父はそういう経験をしたもので、朝飲み、昼飲み、夜飲み、いわゆる酒に浸かってしまったんですね。酒に溺れるというのは、それを忘れるために飲んだようですね。今から15年前に父が亡くなり、12年前に母が亡くなりました。アホな父でしたが、仕事は好きでした。酒を飲んで恐怖心はあったけれど、仕事は好きで力もあって、トンネル工事ではノミを打って、穴をあけて、ダイナマイトを仕掛けて爆発させます。発電所の下

に飯場があって、その小屋で寝泊まりしたらしいです。

私が親父、アボジに呼ばれて日本へ来たのが5、6歳頃のこと。どうやって来たのかは覚えていません。アボジが言うのには、朝鮮人が逃げないように家族を呼び寄せたというように聞いています。

アボジは無事仕事を終わらせて、この町でずっと過ごした。けど、昔の事、仕事はなくメシが食えない。そこで、何をしたかということ、恥ずかしいんですが、泥棒をしたんです。汚点ですがどうしようもない、仕方がない、メシが食えないので。私はまだ、こまいのでよく分からないんですがね。

私は出世に恵まれなかったが、家建てて、幸せまではいかないが、そこそこの幸せはできています。つまり、私たちの家は生活のためではなく、昔の日本政府の力によって連れて来られました。そういう環境の中で、強く生きてきた。何十人も死ぬ中でアボジたちは生きてきた。その代わり、苦勞をしたということですね。

戦争というのは、いかに惨めで酷い、馬鹿げたことですね。これは絶対ダメですね。今でも世界各地では戦争があって子どもが死ぬ。戦争と関係ない人も死ぬ。戦争は酷い。絶対、戦争はしてはいけない。常に友だちにも言っている。

以上で、私の体験談は終わりです。皆さんの血になるか、肉になるかどうか分かりません。何か質問があれば、答えましょう。



鈴木（李）さん

韓国高校生「津賀ダムの工事が終わって、お父さんが亡くなるまで、一緒に日本で暮らしたじゃないですか。日本政府から何らかの形で支援はありましたか？」

鈴木さん「ないです。私が役場へ行って一番怒ったのは、父にも母にも年金が1円も出なかったことです。だから、私は役場へ行って喧嘩しました。皆さんのように若い人は、そういうことをよく勉強して、皆さんの時代になるんだから、年金をもらえない、手当てがない人がいると悲しくなると思うんですね。私がなぜ怒ったのかというと、日本の人はチョットでも、月1万円でも出たのに朝鮮人・韓国人には出ないのかと、この問題で怒ったのです。」

韓国高校生「戦争が終わって韓国へ帰るという選択肢があったと思いますが、なぜ、日本に残ったのですか？」

鈴木さん「アボジとオモニは帰りたかったようですが、私が帰っても喋れないでしょう。又、勉強し直さないかと、ややこしいと思ってアボジとオモニを止めて日本に居るようになった。結局、自分の国へ帰りたいたいという思いはあっても、言葉は喋れない、仕事はどうする、生活問題を考えると日本に住んだ方がましではないか、という考えになりました。同じ韓国人どうし、自分の国の言葉で話をしたいんですよね。できないのが悲しい。勉強したいけど、昔のことでできません。

韓国人、昔で言うと朝鮮の人たちが、この辺に13世帯ありました。酒を飲んだり、食べたという集まりはあったが、勉強するから集まれというものはできませんでした。みんなそれぞれ仕事がない中でも、稼がないとメシが食えないからね。」

ペ先生「私は韓国で歴史を教えている教師です。李さんの韓国での出身はどこですか？」

鈴木さん「私の生まれは、韓国忠清南道公州市反浦面温泉里33番地です。」

ペ先生「お父さんが日本に連れて来られたことについて、お父さんから聞いたことはありますか？」

鈴木さん「1942年頃、突然、日本の軍人が数人家に来て連れていかれました。その軍人は腰にサーベル（軍刀）を下げしており、抵抗はできませんでした。地域の青年60人位が連行されたと聞いています。」



幡多ゼミOB村井さん「鈴木さんが窪川で生きてきた中で、大変な経験、苦勞をされたと思うんですが、小学校、中学校とかその経験を教えて下さい。」

鈴木さん「差別はすごかったです。特に、朝鮮人と差別され、石を投げつけられました。中学の時、昼時に頭からヤカンの水（お茶）をかけられたり、凄かったです。よく言われたのは、『同じメシ食って、どこ違うのか』とよく言われました。

うちのアボジが何回も言って先生と話したんですが、あの年頃の中学生は皆さんもご存知のように、言うことを聞かないんですよね。腕白というか、それが遊びみたいなもので。私は学校へ行くのが嫌で、どうしようと家にいたら、アボジに叩かれるんですよ。『行けー！』それで、最後や、最後や、思うて。

今、日本もイジメが酷いんですよ。どうしたらイジメが無くなるか。皆さん、考えて下さいよ。皆さんの力で何とかなるんじゃないかと、よろしく頼みたいと思うんですよ。」

ペ先生「お土産です。ありがとうございました。」

Ⅲ. 津賀ダム平和祈念碑 10周年記念式典

式次第

- 司会 （幡多ゼミ顧問：山下正寿、上岡橋平）
通訳 （四万十町国際交流員：キム・ヘミン）
1. 開式のあいさつ （実行委員長：山本哲資）
 2. 四万十町長あいさつ（代読：山本安弘局長）
 3. 韓国民団あいさつ （議長：パク・スイル）
 4. 下道地区代表あいさつ （中平吉男）
 5. 献歌・献花 （韓国民団、韓国高校生）
 6. 韓国高校生あいさつ （コン・ソヒョン）
 7. 閉式のあいさつ（幡多ゼミOB：村井真菜）

1. 開式のあいさつ

津賀ダム平和祈念碑建立10周年記念式典

・実行委員長 山本哲資

ヨロブン アンニョンハセヨ！！

津賀ダム平和祈念碑建立10周年記念式典を迎えることができました。10年前の式典を思い出します。暴風雨吹き荒れる中、韓国伝統の供養の儀式「グッ」はビニールシートの下での式典でした。

本日は、日韓関係が何かと取沙汰される中、はるばる韓国から高校生、OB、教員、10名でご参加いただきました。心より歓迎いたします。

そして、この10年間、毎年、夏のこの時期になると、欠かさず多く的人数でお参りに来ていただきました。在日本大韓民国民団高知県地方本部の皆様には、この場を借りて深く感謝申し上げます。同時に今後ともよろしく願います。

又、下道部落の皆様方には、祈念碑建立まで20年にわたり、お墓を守り手入れしていただきました。そして、建立以来10年間、ソッテの柱の立て替え等、言葉に言い尽くせない心使いを頂き、ここに深く感謝とお礼申し上げます。

この平和祈念碑は、幡多高校生ゼミナールの20年にわたる聞き取り調査やダム工事調査の結晶です。両国の先生方は、若い力をますます大切に育てていただきたいものです。

津賀ダム平和祈念碑建立10周年を迎えるに当たって、実行委員会で改めて平和祈念碑の意義を意思統一しました。「平和祈念碑の慰霊を継続

し、過去の歴史を文化的に追求し、韓日両国の未来ある青少年をはじめ、すべての国民が共存し理解しあえるよう、平和の基盤をつくるきっかけとする。」この決められた意義が、広く多くの人々に浸透されることを願っております。

本日の式典は、四万十町長はじめ町職員の方々の大きな協力を得て。成りました。

結びとして、未来を明るく切り開き、平和と友情の輪が永遠に結ばれ、二度とこのような過ちと戦争は繰り返さないことをこの津賀ダム平和祈念碑に皆様と共に誓い、あいさつとします。



（2009 建設時の津賀ダム平和祈念碑と地元の方々）

2. 四万十町長あいさつ

四万十町長 中尾博憲

（代読：大正地域振興局局長 山本安弘）

町長が所用で出席できないため、メッセージを預かっておりますので代読させていただきます。

本日は「津賀ダム平和祈念碑10周年記念式典」にお招きいただきありがとうございます。地元四万十町を代表して追悼と歓迎のあいさつを申し上げます。

はるばる韓国からこの慰霊祭のためにお出でいただいた皆様、ようこそ日本へ、そしてようこそ四万十町へ。日韓関係が微妙に緊張化している今、日本へ来ることに對して大きな不安があったことと拝察します。そのような状況の中、来日していただいたことに心から敬意と歓迎の意を表したいと思います。

10年前のこの祈念碑の除幕式の際に、時の四万十町長（故）前田哲生氏はこの場で「たくさんの犠牲者の上に70年を経た今が成り立っていることに、心の痛みを感じる。」とあいさついたしました。

ました。10年を経た今もその言葉のとおりだと思ひます。改めて、ふるさとに帰ることなくこの地で亡くなられた方々のご冥福を心からお祈りいたします。

この碑文にあるように「ふるさと朝鮮半島に帰れなかった犠牲者のことを語り伝え、この地が国境を越えた友情と平和が広がる場所となりますように」ということを祈念いたしまして、簡単ではございますが、追悼と歓迎の言葉としたいと思ひます。

令和元年8月4日 四万十町長 中尾博憲



(津賀ダム平和祈念碑の碑文)

3. 大韓民国民団 あいさつ

在日本大韓民国民団高知県地方本部
・議長 パク・スイル

皆さん、こんにちは。

本当は、団長があいさつするはずでしたが、夏風邪のため来れなくなり、急遽、私、議長のパク・スイルと言いますが、あいさつをさせてもらいます。

話に聞いた限りでは、10年前は大雨で大変な時に建立式典をしたと聞きました。しかし、今日はこんなに良い天気、韓国からも若い人たちが集まって、ここで式典に臨むことができ、心から感謝しています。

毎年、民団で行事としてこちらに来さしていただいて、下道地区の方によってこんなに綺麗にいつも整備していただいています。また、山本先生や山下先生がコツコツと調査や見守りをされていて、この日を迎えることができ、本当に感謝したいと思ひます。私は歴史的な話はしませんが、民間の韓日の努力で今日の式典を実現でき、

心から感謝したいと思ひます。そして、韓国から来ていただいて本当にありがとうございます。

私たちは3世になりますが、1世の方たちが築いた、命を懸けて頑張っていたいて、私たち2世、3世、4世、今5世の時代になっていますが、こうやって日本に根づくことができたと思ひています。その人たちのことを忘れずに、ましてや日本の方々もコツコツとここまで調べていただいて、本当に感謝の言葉しかありません。

これを機に、10周年、20周年とこの韓日の協力をこれからも続けていただきたいと思います。今日は、本当にありがとうございました。

4. 下道地区代表あいさつ

中平吉男

皆さん、こんにちは。

通常ですと区長がごあいさつするところですが、今日は区長に所用があつて、誠に僭越ですが、私が代わりまして、簡単に、一言ごあいさつをさせていただきます。よろしくお願いいたします。遅くなりましたが、ご紹介いただいた地元の中平でございます。

この作業、工事で当時、不幸にして亡くなられた方々が遠い天国より、皆さまありがとう、と語り合いながらお話をしているものと信じています。

最近、ご承知のように、建設業であれ、山林業、造船業、鉄道工事であっても全ての企業が、まず安全第一で工事をされていることはご承知のことと思ひます。しかし、このダム建設当時は、既にたくさんの方が忘れ去ったことと思ひます。この工事の真っ最中は太平洋戦争の真ただ中であつて、非常に厳しい情勢の中でした。そういったしまして、安全は第一ではなく、物もないし、全て厳しい情勢の中でこの工事が進められていたわけです。当時は、今のような素晴らしい機械もなく、場合によっては身をもって危険を顧みずして作業をされ、本当にご苦労されたということが想像されます。

そういう中での、運悪くして事故に遭われ亡くなった方々に対して、今後ともこのような祭典、

いわゆる供養の祭りごとを継続していただきたいということを強く要望するものでございます。

そういう意味で、何かと申し上げるべきところでございますが、何さまにも急なことでございまして、何の用意もできておりません。誠に言葉足らずで用を得ませんが、地元を代表し、そして区長に代わりましての、粗言ではございますが、私のあいさつといたします。

本日は暑い中、本当にご苦勞様でございました。ありがとうございました。



(3体の地藏)

5. 献歌・献花

大韓国民団笛の演奏・韓国高校生の歌と踊り

まず、おごそかな笛の演奏で犠牲者を鎮魂し、参列者が一本ずつ供養の献花をする間、アリランを演奏してくれました。

ついで、韓国高校生4人が、伝統的な歌を現代Kポップ調にアレンジした防弾少年団のアリランを元気に歌い、踊りました。



(2009 ダムの隧道工事で出た石を採取する
地元の人と高校生<祈念碑の材料>)

6. 韓国高校生あいさつ

代表：ユン・コヨン

みなさま、おはようございます。私はこのたびの「津賀ダム平和記念碑」建立十週年を記念する行事で韓国の生徒を代表してこの場に立ちました釜山にある釜慶高校の1年生、コンソヒョンと申します。どうぞ、よろしくお願いします。

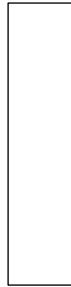
ちょうど10年前、ここで平和のための大きな1歩が踏み出されていたと聞いています。その1歩とは、韓国と日本の平和と共生のために両国の先生方と生徒たち、そして、ここ現地の方々も参加されて、過去、植民地時代に連れてこられ強制労働に動員された韓国人犠牲者供養塔を建設したことで、長いあいだ途切れていた交隣の血脈を繋いでくださったことです。

さらに、それまでの歴史と一連の過程を石に刻み、その崇高たる意味を記念してこられたおかげで、今日、その10周年の席にお供することができていると思っています。また、私たちは今日この場で、両国ともに世代を越えて事業の価値を繋いでいくという新しい歴史の1ページを書いていると思われます。

私は日頃学校で「社会的責任と企業」というテーマを中心に扱う部活を行なっています。そこでのスローガンは、「弱い者のための空席」というものです。今の社会でのけ者にされたり疎外されてきた存在の方々について、一緒に考えて尚且つこの問題に対してより多くの関心を持つように促すために決めたスローガンです。

私たちに与えられた今この場の意味もまた、韓国と日本の皆の記憶から薄れていったりもう既に忘れてしまわれ疎外されていた多数の「弱い存在」を、私たちの心に蘇らせ偲ぶための席ではないでしょうか。巨大権力の横暴から逃れることのできなかったため野蛮な形で強制動員され命を落とし、戦後に置いてはまるで何事もなかったかのように忘れられていったあの「弱い存在」の方々。

「世界文化遺産」という美名のもと隠された「軍艦島」での実像。そして、今でも日本と南太平洋のどこかで招魂を待っているあの「弱い存在」の方々。実に胸が痛んできます。平和を築き守っていく過程はこのような「弱い存在」の方々を努めて追慕し、二度と同じような過ちを繰り返すことのないように努力する形で始まらなければならないと私は思います。



私はここに来る前に回りの人々から最近、韓国と日本との間に横たわっている政治・経済的懸案をめぐる色々な不安と心配の声を耳にしました。中には、私が日本に行くという話を聞いただけで不安を示す人さえいました。両国の平和と共生を築いていくために努めていらっしゃるこちらの方々とは裏腹に、権力という武器を握り締めている両国の為政者たちは、自らの理念と権力欲を達成するがためにまたもや泥沼の戦いを繰り返すことで私たちが追求してきた平和と共生をも脅かし、国民をして敵対の気持を抱かせるかのような疑わしい部分もありました。

普段、植民地時代の歴史について勉強しながら気づいたことがあります。いくら長い時間が経っても平和を脅かす手口にはあまり変わらないということです。ですので、私たちは苦痛を分かち合い、これを記憶に残して誓い、目標を持って実践していく活動を展開し続けることで揺るぎのない平和を築き上げなければならなく、このための挑戦と努力を続けなければなりません。そして、これらを共に模索し具現していくことで、平

和を脅かしている昨今の画策は決して成功できないということを思い知らせなければなりません。仮に今現在は相手の勢いが優っているといっても、健全で善良な平和と共生の波が東アジアはもちろんのこと世界中にあふれるように、草の根の民間外交の輪を広げていかなければならないと思います。

私もまた「平和と共生の旅」10年来の先輩たちと同様、そして、尊敬する両国の先生方のご指導のもと、もう一人の誇らしい「弱い存在」として、平和を守っていくための挑戦と努力を惜しまないつもりです。そうして、これらを実践する私たちみんなの姿がこれから10年後、また100年後の後輩たちにも受け継がれ、私たちの未来が真の理解と協力が伴われた堅実な平和と共生になりますことを心から願ってやみません。

最後に、生きている歴史の現場に志を植え、これまで多大なご尽力で今日を迎えられた先生方と先輩たち、そして、この事業の一部始終を何から何までバックアップしてくださった地域の皆様に、この場を借りて尊敬を込めた感謝のお礼を申し上げます。また、友好を深め平和を守っていこうとする覚悟を改めるこの式典にお招きいただき誠にありがとうございました。どうか津賀ダム建設を前後して亡くなられた方々のお安らかな永眠を祈り、韓・日両国の更なる平和と発展を心からお祈り致します。ありがとうございました。



(下道集会所の木に巣箱を固定)

7. 閉式のあいさつ

幡多高校生ゼミナール OB 村井真菜

本日、津賀ダム平和祈念碑 10 周年記念式典が、多くのご来賓の皆様と共に挙行されましたことに、心より御礼申し上げます。

私がこの津賀ダム強制連行の歴史と出会ったのは、16 歳の時でした。足下の歴史を学ぶ幡多ゼミナールに参加し、地域の歴史を掘り下げて行く事で、教科書では分かり得なかった、想像がいたらなかった事が、自分の暮らしに直結していたことに気づきました。

又、韓国釜山に足を運び、韓国高校生と草の根の交流を図る事で、歴史の傷跡をこれからの私たちの未来を共に作ろうという、強い絆に変えてきました。

津賀ダムの聞き取り調査に訪れるたびに、下道地域の方々が、あたたかく迎えてくださったことを覚えています。この慰霊碑は、語りかけてくれます。私たちがいかに生きるべきか。今日のこの式典が、互いに国をこえ、理解し尊重しあえる、平和の礎を作る歩みの一歩です。

最後になりましたが、日頃から祈念碑周辺の草刈等、様々な受け入れを行ってくださる下道地域の皆様本当にありがとうございます。

又、酷暑をものともせず、ご参加くださった皆様に感謝いたします。本当にありがとうございました。



(ベンチに思いを描く日韓高校生)

IV. 感想文

1. 女性ばかりの中、韓国の先生の気配りに感謝

幡多ゼミ 2 年男子

僕が日韓交流に参加した理由は、父が幡多ゼミの OB で強制連行や従軍慰安婦について調べていて、当時のゼミ生の話も聞きたいと山下先生に呼ばれ、少し興味があったので参加しました。

一日目は、幡多ゼミナール館に行き、晩ご飯を作り韓国の学生さんたちと一緒に食べた後、韓国の結婚式で着る衣装を着させてもらいました。恥ずかしかったけれど刺繍などありかっこ良かったです。その後、オーダーメイドの「共生の旅」と日本語と韓国語で書いた服をもらいました。

二日目は、最初に四万十町役場に行き、役場の中を見させてもらいました。

その後、窪川在住の韓国人の話を聞きました。強制連行で無理やり連れて来られて、韓国語を使うことがないので話せなくなったと言っていました。戦後、日本で暮らす上で沢山の差別をされてきたとも言っていました。悪いこともしていないし、同じ人間なのに差別されるのは理不尽だと思いました。

お昼以降は、大正の廃校になった下道小学校に行きました。そこでは、津賀ダム平和祈念碑に置くベンチを作りました。この時、韓国の先生たちに手伝ってもらって作りました。作り終わったら、一緒に作っていた先生からすごく褒められ、ちょっと恥ずかしかったです。片付けをした後、学生たちと写真を撮りました。

今回のイベントに参加させてもらって、国と国の間に問題があっても、話し合ったり交流することで、すぐに仲良くなれるんだと学びました。

参加学生は女性しかおらず、なじめない時、韓国の男性の先生が話しかけてくれました。英語で話すので、カタコトになったりしましたが、いい経験ができ楽しかったです。

2. 交流し、知り合うことが大切

幡多ゼミ 1 年女子

(事実・感想) 韓国の生徒と一緒に交流しました。

1 日目は釣りと一緒にご飯を食べたりしました。

2 日目は話を聞いたり、ヒノキでベンチや鳥の家を作りました。

(気づき・学び) 韓国の生徒はすごく日本語が上手でした。今ニュースとかで韓国と問題があるけど、「日本と韓国の平和のために」と韓国の先生が言っていたりして日本の事を悪く思っていないんだと思いました。たくさん交流してお互いの国を知ることは大切だと思いました。

(明日すること) 韓国に行きたいです。直接韓国に行って韓国の事を知りたいです。

3. 興味を持つ大切さ

幡多ゼミ 1 年女子

(事実・感想) 韓国的高校生と釣りなどをした。交流をしていく中で、韓国的高校生が話しかけてくれたり、これはなんていうのかと尋ねてきたり、とても日本に興味を持ってくれていると思った。

(気づき・学び) 色々なことに、興味を持つということは、大切だと気づいた。

(明日すること) もっと、外国の方を話してみたいので、英語を頑張りたいとおもった

4. 不安を払拭した幡多ゼミの体験

幡多ゼミ 2 年女子

(事実・感想) 韓国的高校生と交流をして、夕食はお昼と一緒に釣った魚を料理しました。鱈と一緒にとったり、藁で焼いたりしました。とても美味しかったです。食事が終わると、韓国的高校生が部屋に呼んでくれて、韓国の民族衣装のチマチョゴリを着せてくれました。カラフルでとても綺麗でした。チマチョゴリを着る機会は滅多にないことなので良い体験ができました。次は韓国的高校生に着物を着せてあげたいと思いました。

(気づき・学び) 韓国と日本は仲が悪いとニュースで毎日聞いていたので不安だったけど、そんなことはなくて本当に楽しい時間を過ごせました。こんな体験は幡多ゼミでしか出来ないと思うので、良かったと思いました。

5. 日本人の気持ちも知って

幡多ゼミ 2 年女子

(事実・感想) 今日は幡多ゼミの活動で津賀ダムという所に行きました。津賀ダムは日本が韓国を植民地にしていた頃に韓国人を強制連行して作らせたダムです。そこで朝鮮の方が亡くなりました。5 才の小さい子どもの中にはいたそうです。今ではそこに供養の印として平和祈念碑がたてられています。この祈念碑は幡多ゼミの先輩方と津賀ダムの地域の方々が協力して作ったものだそうです。そして今でも地域の方々が掃除をしてくれたりして大切にしています。

(良かったこと) 今は韓国と日本は政治的にもとても仲が悪く韓国でも反日教育もまだ続いています。しかし日本の中にはこうして以前にあったことが忘れられないようにしている人達がいることを韓国の人にももっと知って欲しいと思いました。祈念碑にも刻まれているように「朝鮮と日本が平和で友情的な関係を築く」ことができるようになります。

(今後の活動) 夏休みには実際に韓国の高校生との交流会があります。日本のいい所をたくさん知ってもらいたいし今日学習したように日本の人の気持ちも知ってもらいたいです！

6. 日韓の良いつながりを増やせれば

幡多ゼミ 2 年女子

(事実・感想) 窪川町にある津賀ダムというダムに行って平和祈念碑に献花しました。最初は何でダムに行くがやろう？と思いよったけどそのダムは朝鮮の人が日本に送られて労働して建設されたダムと聞いてびっくりしました。その後は、津賀ダムの平和祈念碑を作るにあたって中心となった瀧石さんお家にお邪魔して色々お話を伺いました！ダム建設の中で亡くなってしまう朝鮮人の方もいて当時は一人一人にお墓を用意出来ない状況だったため、遺体を近くの山に埋めていたという話を聞いたけど、それをおかしいとおもった瀧石さんを中心に地元の人達と幡多ゼミの高校生と一緒に平和祈念碑を 20 年かけ手作りして本当に素晴らしいと思いました。

(気づき・学び) 日韓交流を通して、津賀ダムの平和祈念碑を見た韓国的高校生(反日教育をやったりある程度受けている)が『昔敵だった国がこんなに自分たちの祖先をよくしてくれてありがとう』ということを書いてくれたらしくて、そういう繋がりがもっともっと増えていけば良いのになと思いました!! 昔は朝鮮の人達が窪川町に移住していた関係で同級生に朝鮮の友達を持っている人も多く、ある女性の依頼で朝鮮女性の同級生を探すために国際郵便を送り、韓国の新聞社に取り上げてもらい幡多ゼミの高校生でも出来ることは沢山あるんだなと感じました!! 結局見つけることはできなかったけどそれをきっかけに、津賀ダムのある窪川町にヒントがあるかもしれないと思い、あと 3 日で校舎取り壊しのために書類を整理、破棄するという学校の中で朝鮮人児童の名簿を見つけて色々なことを明らかにすることができて韓国新聞社の次は全国放送に取り上げられていてすごいと思いました!! 自分たちが住んでいる県が意外と戦争とたくさん関わっていてほんとに新しい発見が多い一日でした!!

7. 歴史の共有と友好の輪を周りの人に広げたい

韓国 1 年女子

当初、李隆(イ・ユン)先生から日本訪問を誘われたとき、実は、「共生の旅」ってどのような意味合いで受け入れればいいのかを真剣に考えていなかった。ただ漠然とちょっとした歴史に対する意識や使命感みたいなものを持って当たればよいのでは、と思っただけだった。このような私だったので奥底では多少の不安もあった。とにかく韓・日両国の間の敏感な歴史問題に触れてきていて、私達もその延長に触れ合いに行くということは確かなようだった。しかし、出発前に私の持っている日本人のイメージといえば、植民地時代の歴史を歪曲するかまたは、わざと知らないふりをしているネガティブ的なものばかりだった。日本人の中でも過去の不幸な歴史を認め、いまだ

残っている傷をともに癒しながら記憶していこうとする人がいるとは考えもしていなかった。

というわけで、津賀ダム平和記念碑建立10周年の記念式典の挨拶の言葉を書くときも、強制動員された徴用工の無念さ辛さを強調すること意外は余念がなかった。しかし、具(ク)ジュンモ先生から記念式ではそこに集まった方々がこれまで何を行なってきたのか、また、これからどのようなことをすればよいのかを話し合うだろうと聞いた。だけど、それを聞いただけではどうもピンとこなかった。それで挨拶の言葉を書くのも四苦八苦で結局は先生のアドバイスを受けることに。この一連の過程を経て私の「共生の旅」を思う姿勢が少しずつ変わるようになった。はじめのうちは大げさに韓国人として歴史的使命を持って当たるといった気構えだったんだけど、韓・日両国の草の根の交流に参加して友好と親善の輪を広めていく実際の1歩前進、という狙いを定めての出発となった。

いよいよ出発当日、私たちの膨れ上がった期待をも乗せた空の便は真夏日の青空へ力強く飛び上がった。福岡から高知まではかなりの距離なので列車での移動時間も長かった。ひょっとしたら退屈になりがちなこの時間を太陽の光を跳ね返す緑の森と次から次へと迫ってくる異国の住宅を見ることに当てていた。車窓越えて風景を見つめながら一方では高知の生徒との出会いを想像したり居眠りをしているうちに高知に着き、やがてはじめて高知の生徒たちと出会うことになった。

しかし、いざと出会ったらどうしたらいいか全くわからなかった。それに、私の頭に入っている日本語といえはせいぜい出発二三日前に教えてもらった挨拶の言葉のいくつかが全部だったので、容易には近づくことができなかった。結局、彼らと親しくなったのは釣りに行ってからのことだった。互いに名前を聞いたり両国の文化や言葉に触れ合っていたら、かなりの類似性にはじめて気がつき言葉の壁なんて案外高いものではなかった。炎天のもと英語と日本語と韓国語とがワイワイガヤガヤと乱舞し、挙句の果てには身振り手振りも手伝って疎通だった。ままならぬから却って相手のいうことに集中することもあって、これが親しみを増す材料にもなったと思う。

その翌日、木材所へ見学に行く途中私たちは互いに韓国語と日本語を教え合った。初日は馴染みながら親しみを覚えることにポイントをおいたけど、ある程度親しくなった2日目からは英語抜きでそれぞれの母国語での対話へ気持ちが走ったのだろう。こうして、たとえば単語のひとつでも日本語または韓国語で言おうとしていたら、いつの間にか日本語と韓国語の語学講座が開いていた。私たちは楽しく喋って笑いながらそれを一つ一つと飲み込んでいた。

やがて木材所に着いた私たちはベンチと鳥小屋の製作に当たった。鳥小屋を作ることも結構面白かったけど、今回のベンチ製作には特別な意味

があったと私は思っている。なぜなら、あのベンチには私たち11名の掌紋とメッセージを残しておいたからだ。これには再会を願う私たちの気持ちとこの交流がいつまでも続くことを祈る私たちの切実な願望が込められている。

たとえ、今は単なる小さい1歩に過ぎないかも知れないけど、結局私たちの目指すところは両国の和合と平和への安着だろう。今回私は「共生の旅」を通じて草の根の民間交流というものがどれだけ大事かをつくづくと知らされた。草の根の輪を広げる努力を着実に積み重ねていけば、両国の平和と友好もそう遠くはないという希望が見えてくる。わずか2日間で私が変わったように、より多くの人が交流に参加して歴史に対する見方を変えてくれればと思う。

今の韓・日の政局の影響もあって日本へ行く前の私の対日観はかなり否定的な影をかぶっていた。日本の政府はもちろん国民に対してまでもネガティブな先入観が走り克服と排除の対象とか思っていなかった。ところが、今回、高知の生徒たちと一緒に話して行動して考えて笑った時間は、これから両国民が仲良く共生するにはどうしたらいいかを考えさせるよいきっかけとなった。2日間友情を築き色々と見て学んだことがたくさんあって私には本当に有意義だった。別れるときは名残惜しさに足が重くなってきたけど、また次回があるから笑顔でさよならが言えた。

8月4日、津賀ダム平和記念碑建立10周年の記念式典に参加した。韓国の生徒代表としての挨拶と慰霊のアリランを披露する日でもあって、どきどきしながら式場に向かったけど、いざ式場に着いたら落ち着けそうな空間だったし、なぜかこのときだけは強烈な日差しも安静を助けてくれた。いよいよ記念式典のスタート、各代表のお言葉と追悼と献花の順に進められ、特に津賀ダム建設の際に犠牲となった徴用工の霊前に一人ずつ花を捧げる場面では思わず胸が詰まってきた。韓国人だけでなく日本人の中でも悲しみを共有する方々がいることを目の当たりにしたからだ。すごく感動的だった。一方、日本の方々は私たちのアリランに感銘を受けたと聞いているけど、粗末ながら私たちのアリランが受けていたことはとても嬉しい。その場を借りて私たちの願望を伝えることができたからだ。私たちがアリランに込めた希望どおりこの交流が末永く受け継がれ、いつかは和合と平和が完成されるという願望だ。

「共生の旅」が終わった今、私はこの道程の真の意味合いをはじめて納得する。特に両国の関係が激しく揺れ動いている今の時期に、権力も勢力も何一つ持たない何人かの教師と生徒とが炎天を遙々日本まで行って、歴史を共有し理解と親善で友好を深めたことは決して小さいことではない。行く前にもうちょっと日本の勉強をして行ったら、という後悔もしてはいるけど、これからでも頑張りたい。幸いにして行く前と比べたら「共生の旅」を経験した後の私はひとまわり大きくなった

ような気がする。また、旅を終え帰ってきている今こそを新たな出発点にたく、それは今回感じ得られた多くのものを友達や周りの人々に伝え、1人にでも10人にでもこの輪を広めていくこと。

最後になったけど、両国の先生の方々と先輩たちが歩んできたこの道を一緒に歩かせて頂いたことに深く感謝を申し上げるとともに、「共生の旅」2019の準備と対応にお骨を折られた日本の皆様にも厚くお礼を申し上げたい。

8. 胸に宿った希望…釜山で待ってるよ〜っ！

韓国1年女子

金海空港から福岡へ向かう飛行機に搭乗したとき、私の胸には期待と不安とが半々ずつどよめいていた。まずは最近の韓・日両国の政治や経済的な情勢を考えると不安が走り、私たちと同じような日本の高校生に会って歴史や文化について語り合うことと、「津賀ダム平和記念碑」の建立10周年を記念する式典にも参加することを考えれば、ワクワクドキドキの気持ちがその後を続く。しかし、列車から降りて高知の先生方と生徒たちにはじめてお会いしてからは、「そんなことあったっけ」といいたいぐらいすぐさま親しみを感じ、不安の気持ちはどこかへ消えていた。

到着早々に私たちは海へ釣りに行った。釣りの傍ら英語・日本語・韓国語交じりの対話が飛び交う。こんな対応を企画された幡多ゼミの先生方に心底の感謝を抱き、それこそ「日本に来て本当によかった」の一言に限る。それからみんなで一緒に日本人のソウルフードともいえるお寿司を味わう。美味しいものにも噛みもしないうちにお腹へ流れ込む。もちろん用意してくださった先生方と宿毛の皆さんには感謝の気持ちでいっぱい。

連日メディアに報道される殺伐な内容とはまるで別天地のように、不幸ながら共有すべき歴史のことに目を向けられ、真の平和と友好を築くためこのような活動が続けられる高知の皆様には実に頭が下がる。そして、何でも私たちのことを思いやり、楽しい時間をともに過ごしてくれた高知の生徒たちにもこの幸せいっぱいの気持ちを伝えたい。

なかでもいちばん記憶に残っているのは、私たち生徒同士のプログラムが全て終わった後、高知の生徒たちがそれまで撮った写真とともに韓国語で書いた手紙をくれたこと。このたび分かち合った大事な思い出を胸に秘めて後できっとまた会おうとの内容だった。すぐにありがとうを言いたくても喉が詰まってきて言葉にならない。誰もが手紙とプレゼントを手渡し涙ぐんで名残を惜しむ。こうやってみれば両国の若手が歴史に学び文化を理解する努力を輪を広めながら続けていけば、今の危機なんてものともせず良きパートナーとして両国の発展に尽くせるという確信が立つ。

いつもながら別れは悲しい。しかし、もう仲間となった高知の生徒たちと先生方との別れは満更そうでもない。別れというよりはむしろ未来へ

飛び立つ新たな出発という気がして笑いが止まらない。恐れ多くも一緒に歌を歌われ、宿所や食事をはじめ何から何まで尽くしてくださった山下先生、そして、上岡先生、山本先生、坂下先生、今城先生、森（？）先生、東（？）先生には本当に色々とお世話になった。おかげさまで未来へ向かう新たな希望がもう胸に宿っている。

あ、新しくできた友達を忘れちゃいけないね。オカベ、アイリ、リオ、リポ、ルナ、イチカ、チハル！君たちのおかげで思い出となった花火も最高だったし、バスのなかで歌ったことから一緒に過ごしていた時間の全てが私には幸せだったの。きっと釜山に来るんだよね。私、首を長くして待ってるよ〜っ！

V. 資料

1. メッセージ

徴用工問題解決に向け、今こそ民間交流を広げよう

2019年2月7日 幡多高校生ゼミナール顧問会

韓国では最高裁が元徴用工への賠償を命じ、該当日本企業の韓国資産差し押さえを決定しました。

対して日本政府は猛反発し、レーダー照射事件もあって、国家間の対立は泥仕合の様相を呈しています。このような状況をどう乗り越えたらいいのか、これまでの経験を踏まえて、私たちなりに問題提起をしてみたいと思います。

幡多高校生ゼミナールは1990年から地域の朝鮮人強制連行問題を調査し、1993年より韓国ソウルを訪問し草の根的な日韓交流を進めてきました。その様子は映画「渡り川」に収録され、韓国国営テレビでも報道されました。

その後、2003年より韓国釜山の高校生と12度に及ぶ相互訪問交流を行い、親睦を深めてきました。日本でも韓国でも地域から学ぶとともに、強制連行、従軍慰安婦、韓国人被爆者、竹島等々、シビアな問題について率直な意見交換を行なっています。討論は噛み合わないこともありますが、主張をぶつけ合うことで互いの違いを尊重し、一致点で行動する高校生らしい清々しい交流パターンが生まれました。本音で語り合うことで信頼と友情が育まれます。実際、彼らの日韓交流は高校卒業後も個人的に長く続く場合があります。

結果、2009年地域の方々の協力を得て、津賀ダム平和祈念碑を建立することができました。津賀ダム建設で亡くなった多くの朝鮮人犠牲者を弔い、日韓の平和で友好的な未来を願ったものです。

国家間の感情的な対立が目立つ現在、私たちに大切なことは何より会って交流することではないでしょうか。直に顔と顔を合わせれば何かが生まれます。草の根的な民間交流こそ、今求められていると思いませんか。最後に、津賀ダム平和祈念碑建立式典に参加した日韓高校生の感想を紹介します。



地蔵に仕上げのノミをふるう韓国高校生



日韓討論の一場面

感想文（抜粋）

・日本高校生16歳

僕たちは慰霊碑のそばにすえる「お地蔵様」を彫りました。日本式と韓国式の2体です。柏島の海で

丸い石を拾ってきて、皆で金づちとノミでガンガン彫りました。石は思ったよりも硬く大変な作業でしたが、歴史を作る行事に関わっていると思うと全く苦ではありませんでした。この作業の他には慰霊碑建設現場に行き、石を運んだり木を植えたり、朝鮮人の方のお墓を供養しました。数ヶ所に点在する無名墓の土を小さな骨つぼにとり、慰霊碑の下部に安置するのも僕たち高校生の大事な仕事でした。

今年の夏休み、高知県大正の津賀ダムで慰霊碑の除幕式を行いました。当日は大雨だったけれど、韓国で大雨は「歓迎の涙」と言われるくらいなので大雨の中決行しました。120 人もの参加でとても立派な、そしてとても感動した式になりました。韓国の人たちが涙を流しながら供養の民族踊りを踊りました。

慰霊碑建設は 20 年近くかかって今年やっと実現したものです。故郷に帰ることができないまま日本で亡くなった方々が数多くいることを知ってとても悲しいことだと思いました。現在の僕たちに罪はないと思いますが、果たすべき責任の重さを感じます。これからはこのような事がない平和な世の中にしなければなりません。

・韓国高校生 17 歳

お亡くなりになった強制徴用犠牲者を称える慰霊祭は厳粛な雰囲気続き、歌を歌い、踊りを見る時は涙が出た。心から強制徴用された方々の冥福を祈った。慰霊祭が終わった後には「交流の夜」があり、日本の学生たちとの会話で感銘を受けた。特に「学校では強制徴用について学んだことがないので今回の慰霊祭で初めて知った。本当にごめんね」と言ってくれた N ちゃんの姿が忘れられない。

日本政府は昔の歴史について謝罪することを回避し、歴史を歪曲し、次の世代が知らないようにしている。その点がとても腹が立った。しかし、今回の幡多セミナーは両国の理解や仲直りに良いきっかけになったと思う。慰霊祭に来てくださったメディアの記者たち、台風の大雨にもかかわらず来てくださった多くの日本人を見て本当にありがたい気持ちで一杯だった。皆さんが民族ではなく、人間としての道理を見せてくれる姿を見て、韓国も歴史問題について感情的にならずにもっと理性的に考えるべきであると思った。今回の共生の旅を通して韓日関係にもっと関心を持ちたいと思うようになった。初めて来た日本は、体は大変だったが心はその分軽かった。



建設に関わった地元の方々と高校生



平和祈念碑
津賀ダム



映画「渡り川」の DVD(上映権付)

- ・ 四万十川は「渡り川」ともいう。海峡を渡り国境を越え出会う、高校生たちの青春ドキュメンタリー映画
- ・ キネマ旬報ドキュメンタリー部門 1 位
- ・ 釜山国際映画祭 参加作品
- ・ DVD 1500 円 (送料別 200 円)

・ 連絡先

〒787-0051 高知県市四万十市具同田黒 1-10-8

Tel・fax 0880-37-3833 上岡橋平

メール kamiokakyouhei@agate.plala.or.jp

韓国高校生と友好誓う

同ダムは強制連行されるなどした多数の朝鮮人が作業に従事し、1944年に完成。幡多高校生ゼミナールの調査で、工事中の事故などで犠牲となった朝鮮人を葬った墓が確認された。慰霊碑は、ゼミ生と住民が2009年に建立。ゼミ生らは、ダム工事中に出たとされる石を同町昭和の山中から約300個集めて石碑に。朝鮮人労働者のものと思われる無名墓から採った土を納めている。

同ゼミは韓国との相互訪問を続けており、今回の慰霊祭に合わせ、2日来高したのは韓国の高校生ら8人。4日の慰霊祭では碑の建立まで約20年間、無名墓を守ってきた近くの中平吉勇さん(89)が「危険を顧みず作業をして亡くなった方々の供養を、今後も続けたい」とあいさつ。釜山の高校生4人がポップス風にアレンジした民謡「アリラン」を歌い踊って、朝鮮人労働者のみ霊にささげた。

日韓関係が悪化する中での来日となったが、高校生の孔昭現

日韓関係悪化中来高「意義ある行事」



慰霊碑の前で「アリラン」を歌いながら踊る韓国の高校生
(四万十町下道)

【窪川】第2次世界大戦中に高岡郡四万十町下道の津賀ダム工事中に命を落とした朝鮮人労働者を慰霊する平和祈念碑が建てられ、今年で10年を迎えた。このほど同地区にある碑の前で慰霊祭が行われ、韓国の高校生や地元住民ら約60人が平和と友好を誓った。

(井上太郎)

津賀ダム慰霊碑建立10年

四万十町

さん(16)は「両親は少し心配していたが、自分は一切迷いはなかった。日本と韓国の歴史を知り、上で意義のある行事に参加できて感動した」と話した。

韓国の一行は3日、父親が津賀ダム工事に動員されたため朝

鮮半島から移住させられた同町在住の李洋一(11)日本名・鈴木洋一(11)さん(82)から当時の体験を聞いた。鳥の巣箱やベンチを作る木工体験でも親交を深めた。

また、10年前の大学時代に慰霊碑建立に関わった趙娥顕さん(30)も、通信社「ニュース1」の記者として同行取材。「日本で亡くなった朝鮮人を手厚く慰霊している人たちがいることは、韓国でほとんど知られていない。日韓関係が悪化したこの状況だからこそ伝えたい」と話した。

県内支社局 佐局 ☎08888520158 北局 ☎0887762432 長局 ☎0887560500 芸局 ☎0887
土支 ☎0888520491 額支 ☎0887762441 香総 ☎0887560090 安支 ☎0887

津賀ダム碑10年

徴用工に慰霊の献花

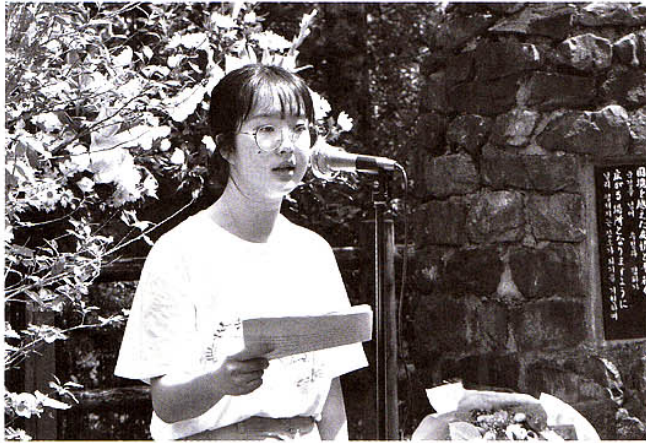
釜山の高校生も参加

第二次大戦末期、津賀ダム（四万十町津賀）建設のために強制徴用され、過酷な労働で命を落とした朝鮮人労働者の慰霊のため2009年に建

立された「平和祈念碑」10周年を記念した式典が4日午前、ダム湖畔の碑前で開催。式典には釜山の高校生の参加もあり、工事で命を落とした犠牲

者に思いを馳せ、非戦の思い、国家間に摩擦がある中での日韓市民交流の大切さを温め合いました。主催実行委員会を代表し山本哲賢実行委員長が「未来を明るく切りひらき、二度とこのような過ちと戦争を繰り返さないことをみなさんと祈念碑に誓う」と開式の辞。

中尾博憲四万十町長のメッセージが紹介され、韓国国民団高知地本のパク・スイル議長、碑を日常的に管理している下道地区代表の中平吉男さんのあいさつに続き、参加者が碑に献花しました。



韓日の平和と発展を願い発言したコン・ソヒョンさん



「無事できたことを心よりうれしく思う」山本哲賢さん



献花する参加者



平和祈念碑

釜慶高校1年生のコン・ソヒョンさんが「津賀ダムは過去の傷跡を癒やし、平和と共生の未来へ導く橋渡しだ。この事業が受け継がれ、両国の未来が平和と共生に定着すること、亡くなられた労働者の安らかな眠りと、韓日両国の平和と発展を祈る」と発言しました。韓国の高校生は碑前で密陽・珍島のバージョンをおりませ（地域ごとに異なるアクリンがある）たアクリンを踊りながら歌いました。

式典を終えたユン・コウンさん（釜山ムンヒョン女子高1年）は「日本に来る前は心配でしたが、とても楽しかった。日本の高校生もぜひ釜山に来てほしい」と話しました。

日韓の国家間対立が強まり、民間交流にも影響が出ている中での来日でしたが、釜山側関係者によると釜山市教育庁などから、交流中止を求める指示等は一切なかったとのこと。

2019.8.15 高知

08887-261-0054
08887-261-0609

…地域の話題、情報を寄せてください…

四万十町の津賀ダムの工事中に命を落とした朝鮮人労働者たちを慰霊するため、韓国の高校生らが先日来高。供養を続けてきた地元住民らと交流した。

その一行に、韓国の通信社記者がいた。高校生だった13年前と、大学生だった10年前にも津賀ダムを訪れ、慰霊碑

の建立にも関わったという。亡くなった朝鮮人を丁寧に弔ってきた日本人がいることを伝える」と、墓を守ってきた地区の男性に熱心に話を聞いていた。

主役はあすち 関わったという。亡く

反日

に、日韓関係はかつてないほど悪化。反日ムード一色の韓国では、日本製の自動車や化粧品などの不買運動が盛り上がり、日本を訪れる観光客も激減している。

一方の日本でも、ここ10年ほどでじわりと「嫌韓」感情が広がってきた。ネットの住民らは「いい機会だから国交断絶しよう」「街がきれいになるから来なくていい」などと書き込み、事態をおおっている。

皮肉なことに、日本経済が打撃を受けるのを喜ぶような人たちがこそ「反日」に見えるのだが。慰霊碑の前で見た、心を通わせようと努力する人たちの姿が一層まぶしい。

(窪川・井上太郎)

2019.8.21 高知

韓国との平和、友好ちかう

太平洋戦争中の1944年、高岡郡四万十町の栲原川に、発電用のダムが造られました。津賀ダムといいます。この工事には、当時、日本の一部だった朝鮮半島から多くの人々が連れてこられ、働かされました。

中には命を落とした人も。ダム近くにはその人たちの「いれいひ」があり、建てられて10年になりました。8月には「いれい祭」も行われ、地元の人々と韓国の高校生らおよそ60人が、平和と友好をちかいました。

津賀ダムの工事のことは、県西部の高校生や先生たちでつくる「幡多



高校生ゼミナール(幡多ゼミ)」が1980年代から調査。戦争時の話を聞いたり、なくなった人のお墓を見つたりしました。

いれいひは、幡多ゼミと住民が2009年に建てました。今回のいれい祭には韓国から8人が参加し、高校生4人は、韓国の歌とおどり=写真=をなくなった人にささげました。

ニュース 百科

四国 津賀ダム強制徴用工 犠牲者追悼 10年 「平和の礎を位置づける」

[編集者]

韓日関係が悪化の一途をたどっている。日本は韓国最高裁の強制徴用賠償判決の経済報復措置として韓国の貿易の輸出規制を強化したのに続き、ホワイト国（輸出審査優遇）除外を行った。

このような状況下でも、戦争の痛みと強制徴用犠牲者を忘れぬ日本人たちは、安倍政権に向かって警告する。歴史認識を共有し、友情の連帯がこれまで以上に必要な今、News1 は、これらの揺るぎない平和への動きにスポットを当て、関係改善のための解決策を考えていきたい。

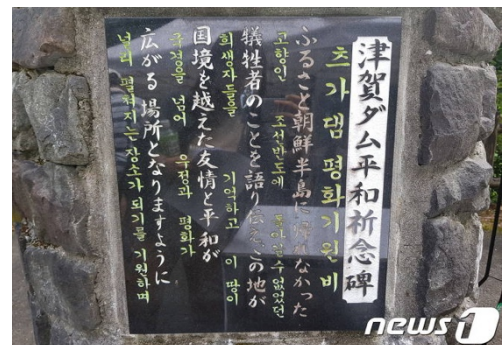


8月4日午前11時ごろ、高知県高岡郡四万十町下道地区にある津賀ダム平和祈念碑前で日本人が強制徴用犠牲者を追悼するために献花している

（News1 チョ・アヒョン記者）午前中、日本でも30度を超える暑さが猛威を振るった。4日午前10時ごろ、四国（高知県津賀ダム）に動員された強制徴用韓国人犠牲者慰霊式典に、下道(しもどう)地域住民や四万十町職員など、40人余りが集まった。

日本政府の韓国に対する貿易の輸出規制強化措置により、日韓両国の関係がこれまでになく凍りついているが、過去10年間着実に慰霊に参加するなど、津賀ダム強制徴用犠牲者について知る地域の人々は、凍りつく日韓情勢にとらわれることなく席をともにした。

炎天下、参加者の額とシャツはすぐに汗でにじんだ。高知県 高岡郡 四万十町 下道(しもどう)地区の幾重にも曲がりくねった1車線の道路沿いに、「津賀ダム平和祈念碑」が建っている。石塔の下には地蔵があり、記念碑の隣には、日本の高校生たちが平和を祈った陶板がついている。そびえ立つ木のポール(ソッテ)の上にカササギ像をかかげ「魂が故郷に帰れるよう」意味を込めたという。祈念碑をよく見ると、字を手書きし、一つ一つ石を積み上げた心がにじみ出ており、



高知県の津賀ダムに強制連行された朝鮮人たちの追悼のため、2009年8月に建てられた津賀ダム平和祈念碑

故国の地を踏むことなく、軍国主義に命を落とした強制徴用犠牲者たちを追悼している。
津賀ダム平和祈念碑には「ふるさと朝鮮半島に帰れなかった犠牲者のことを伝え続け、この地が
国境を越えた友情と平和が広がる場所となりますように」と日本語とハングルで書かれている。

この日は、平和祈念碑建立 10 周年になる日だ。2009 年 8 月の祈念碑建立式典では、まるで空
が崩れるように激しい雨が地面を濡らした。強制徴用被害者の「恨」（ハン）の混じった涙をこ
ぼすような豪雨だったという。その日を思い浮かべる多くの地域住民は、10 年目のこの日、快晴
の空を眺めながら強制徴用犠牲者の冥福と、同じ悲劇が起こらないことを願った。

この日の行事に参加した「幡多ゼミ」顧問である山下正寿さん(74) は、「20 年に渡って続い
てきた韓日高校生交流が、今日の日韓の状況下においても続けることができたことこそ重要であ
る」とし、「地域と民間団体の多くの人々の協力で行うことができた」と語った。

「幡多ゼミ」は日本の高校生サークルで 1983 年に作
られた後、自発的に津賀ダム強制徴用に動員された朝
鮮人犠牲者と朝鮮人の無縁墓の調査を始めた。以後記
念碑を建設するまで聞き取り調査を進め、募金活動を
しながら、地域住民、自治体、津賀ダムの電力会社(四
国電力)などを説得してきた。

式典には、幡多ゼミに協力を惜しまず毎年行われる
強制徴用犠牲者慰霊祭に出席してきた山本安弘さん(四
万十町大正地域振興局長)と 20 年以上朝鮮人の無縁墓
を管理していた中平吉男さんなど、多くの人々が参加
した。

山本哲資さん(津賀ダム平和祈念碑 10 周年記念式典実
行委員長)は「この祈念碑は、幡多ゼミ高校生の 20 年にわたる聞き取り調査と津賀ダム工事の調
査の結晶」とし、「平和と友情の絆が永遠に結ばれ、二度とこのような間違いと戦争を繰り返さ
ないことを皆さんと一緒に誓う」と述べた。

周辺の心配の中で日本に行くことさえ容易でなかっ
た状況をのりこえ、韓国の女子高生 4 人が 7 時間以上
列車を乗り継ぎ、四国南端の地で式典に参加した。韓
国女子高生たちは式典で、強制徴用犠牲者の慰霊た
め、故国の民謡アリランを歌った。全国各地の伝統ア
リランと最新 K-POP をリミックスした防弾少年団の
歌であった。無伴奏でもブレない
学生たちの力強い声と情熱に満ちた顔に参加者は明
るい笑顔を浮かべた。

釜山プギョン高校 1 年生のコン・ソヒョンさん
(16) はこの日の挨拶で「たとえ今は微力であって
も、平和と共生の波がこの世に溢れるよう、草の根
の民間外交を広げていかなければならない」とし、



平和祈念碑建立 10 周年記念式で山本哲資さん(実行
委員長)が挨拶



釜山から来た高校 1 年生のハンジュン (左から)、コン
ソヒョン、ユンゴウン、ソンヒョンが 4 日、津賀ダム平和
祈念碑建立 10 周年記念でアリランを歌う

「ここ津賀ダムは過去の傷痕を癒し、平和と共生の未来へ導く架橋であり、今後 10 年、100 年後にも追悼の儀式が受け継がれ、両国にとって共生的で平和な未来がくる事を祈る」と述べた。

この日の式典に参加した宿毛市議会議員の今城隆さん（58）は「徴用工の人々の人生や平和祈念碑のことを深く理解し、人々に伝え広げる教育が必要だ」とし、「これを受け取る人（日本人）も、政治的な先入観を持たずに一人の人間として受け入れる姿勢が必要だ」と強調した。

また、「韓日関係をよく言わない政治家たちは、特定の目的によってすべてを制御しようとする状況」とし「このような状況に左右されずに、人々が自分の考えを堂々と話すことができる日を一日も早く作ることが私たちの役割だと思っている」と力説した。

林瑞穂さん(四万十町教育委員会生涯学習課長)は「実行委員長である山本先生から津賀ダムに強制徴用韓国人犠牲者が動員された話を聞くようになった」と「被害者の魂が安らかに眠るよう祈りながら献花した」と述べた。また、「今、韓日関係が良くないが、友好関係が続くことを心から願う」と付け加えた。

四万十町議員に出馬し、今年 2 月に当選した村井まなさん（32）は、閉会の辞で「津賀ダム強制連行の歴史を初めて接したのは 16 歳のときだった」とし「幡多ゼミに参加し、私の故郷の歴史を発掘していく過程で、教科書では学ばない想像することもできなかった事実が、私たちの生活に直結しているということが分かった」と強調した。それとともに「津賀ダムの聞き取り調査をするたびに、下道地区住民の方々が私を暖かく迎えてくれたことを覚えている」とし、「この慰霊碑は、私たちが今後どのように生きるべきかを語りかける」と述べた。続いて「今日の式典は、国境を越えて互いを尊重し理解し合うことで、平和の基礎を固める第一歩になるだろう」と付け加えた。

式典終了後も、下道地区住民は強制徴用犠牲者を追悼する祈念碑周辺を、最後まで丁寧に掃除していた。



4 日午前、津賀ダム平和祈念碑建立 10 周年記念式典が終わった後、地域住民が、最後まで残って掃除していた

日韓 今こそ平和の祈り



津賀ダム建設労働者慰霊祭

四万十町下道の津賀ダム建設工事で犠牲になった朝鮮人労働者を追悼する慰霊祭が、現地の平和祈念碑前であった。幡多高校生ゼミナール(幡多ゼミ)の生徒や地元住民らが碑を建てて10年となり、今年は記念式典(実行委主催)も合わせて開催。韓国の高校生を含む約60人が参加し、日韓両国の友好と平和を祈った。

(石塚直人)

四万十町で60人交流



平和祈念碑前で献花。黙とうする参加者。①明るくアレンジした「アリラン」を披露する韓国の高校生(いずれも四万十町で)

津賀ダムは四万十川の支流・梶原川にある水力発電用ダムで、戦時中の1944年に完成した。幡多ゼミが、90年頃から県内に強制連行された朝鮮人の消息を調べるうち、同ダム工事に約200人以上が動員され、事故などで亡くなった人の無名墓が多

く残っていることがわかった。

碑の建立は、ゼミ生の聞き取りで地元女性らが「せめて慰霊碑を」とつぶやいたのがきっかけ。幡多ゼミは93年から韓国を何度も訪れて現地の高

校生と交流しており、形状は韓国式に倣った。工事中に出たとされる石を住民と一緒に約300個集めて高さ約1・8メートルの石碑とし、無名墓の土を納め、2009年8月に完成した。

碑前では毎年、地元有志と在日大韓民国民団県地方本部メンバーが慰霊祭をしてい

るが、今年は建立式典以来10年ぶりに、韓国・釜山の高校生と教員らを招待。一行は2泊3日の日程で幡多ゼミと合宿するプログラムを組んだ。

8月4日の記念式典には通訳も同行し、実行委の山本哲資委員長(76)らがあいさつした後、建立まで20年以上にわたり無名墓の世話をしてきた中平吉男さん(89)が「当時はろくな機械もなく、工事は危険を極めた」と犠牲者の無念を思いやった。

続いて参加者全員が献花し、韓国の高校生4人が明るく軽やかに編曲した民謡「アリラン」を歌と踊りで披露。代表の釜慶高校1年孔昭現さん(16)は「ここは過去の傷痕を癒やし、平和と共生の未来を導く橋渡しの場。力を合わせ、民間外交の輪を広げていきます」とメッセージを読み上げた。

本来は哀調を帯びた「アリラン」の編曲について、韓国の指導教諭(54)は「10年前の式典は厳かな反面、重苦しいものでした。今回は明るい未来への展望を強調したかったのです」と話した。

津賀ダム朝鮮人「名簿」発見



昭和19年の旧大正村資料

第二次世界大戦中、津賀ダム建設に関わった朝鮮人の名簿が、十一日までに同町所有の資料の中から見つかった。県内ではこれまでに津賀ダムや高知市などの建設工事の記録書類から朝鮮人の氏名が断片的に判明していたが、事業所単位でまとまって朝鮮人労働者の名前が確認されたのは県内では初。津賀ダムの裏面を調べている関係者は、この資料を元に韓国側と共同で遺族の探し出しなどに取り組む考え。

遺族捜しに活用も



一九〇〇年代、日本は朝鮮半島を間接、直接的に支配し、土地を奪われた朝鮮人の一部は就労のため渡日。また日本政府は一九三九(昭和十四)年から四五年まで強制連行を推進し、戦時日本には八百八十人の朝鮮人がいたとされている。本県では一九九一(平成三)年に平和団体や在日朝鮮人総連合会(朝鮮総連)県本部が「朝鮮人強制連行資料調査団」を結成し、三年がかりで統計資料や証言などを収集。ダムや鉱山、軍事施設など県内十七市町村二十四カ所の工事現場に、強制連行された人だけでも二万人以上の朝鮮人がいたと記録付けたり、生前の記録の一部として伝えている。朝鮮人労働者が建設にかかわり、昭和19年に発進を始めた津賀ダム(大正町水道)は、県外では

津賀ダム建設時の作業員宿舎の名簿が見つかった旧大正村役場の人口調査資料(大正町野々の町立歴史館蔵)

いる。今発見したのは、旧大正村役場の昭和十九年三月十二日現在「人口調査資料」。三十六年までの町立歴史館蔵作業員宿舎の町史調査資料が昨年末、役場の土蔵で見つかり、その後の調べで、同町大正村水道にあった津賀ダム建設の事業場(作業員宿舎)の名簿がまわっていることが分かった。

名簿には、調査に対する申告欄(住所主)の氏名が事業場主と合わせて九十九人記載されている。このほかに名前はないが、家族を名乗って六十六人がいちごも記載されている。

調査団の朝鮮人の代表で、朝鮮総連県本部委員長の鄭基徳氏は、九十九人のうち十六人は朝鮮名と親戚名したもの、姓名の二部で朝鮮名が残っている人が五十四人、一人名無し。

また、調査団では別に韓国に強制連行などの裏面を調べている津賀ダム建設工事の山主寿氏は「労働者の中でも日本人は旧村内の民衆に寄与し、朝鮮人は工事現場(の宿舎)に集められていた」という地元民の証言から「金貴が朝鮮人であるのが食糧的」と分析している。

津賀ダム建設にかかわった朝鮮人労働者の数について調査団は今までは推定していたが、「六十人の朝鮮人」という証言と、同ダムと

現の町内の宿舎所手事を調べた「宿舎組」に収容時、朝鮮人労働者三百八十四人、その家族三十八人がいたという資料だけだった。韓国政府は昨年、「日帝強占期朝鮮労働者被害真相調査委員会」を設立。同会との連携を模索している山下さんらは「名簿を元に遺族をたどり、生前の記録の一部として伝えたい」と話している。

朝鮮人労働者の名簿は、県外では歴史資料館の名簿を企業が所有していたケースが多くある。

高知

高知総局
〒780-0870
高知市本町5-1-13
☎088(823)5115
FAX(824)2541

四万十支局
〒787-0011
四万十市白山元町
2-4-5
☎0880(35)2076
FAX(35)3756

須崎支局
〒785-0012
須崎市西町2-28
☎0889(42)0272
FAX(42)0631

安芸支局
〒784-0001
安芸市矢ノ丸3-12-3
☎0887(35)2214
FAX(34)1770

購読のお申し込みは
0120-33-0843
(7:00~21:00)

購読・配達のご用は
高知(823)4007
(823)2622
安芸(32)0024
野市(58)0306
南国(863)0804
土佐山田(53)0306

朝鮮人労働の記録確認

韓多ゼミ 民間団体 韓国側へ申請手助け

戦時中の朝鮮人労働者について、日本国内に残る記録を探し、元労働者やその家族らに對する韓国の支援制度認定に生かしてもらおうと、高校生の平和学習グループ「韓多ゼミ生ゼミナール」(韓多ゼミ)や、民間団体「平和資料館・草の家」が調査を続けている。

(岡見理沙)

高知 戦争の記憶 記録

韓多ゼミは83年に発足。米国のビキニ水爆実験の時に操業していた県内のマグロ漁船の元乗組員の追跡調査や、戦時中に強制連行された朝鮮人問題や環境問題などに取り組んでいる。

元労働者に関する記録の調



朴植洙さん(1939年生)撮影。川村棟河さん提供

査は、同ゼミのメンバーが以前、強制連行について取り組んだときに知り合った、韓国在住の朴棟河さんからの依頼がきっかけ。棟河さんの父・植洙さんは戦前、津賀ダム(四万十町)で働き、労働者運動を理由に検挙された経験があった。韓国には独立運動のために日本に抵抗した人やその家族らが生活支援、年金などを受けられる独立有功者礼遇制度があり、棟河さんも昨年申請した。しかし、記録が韓国側になく、申請が却下されたため、協力を韓多ゼミに求めた。

そこで、韓多ゼミや草の家のメンバーらが、日本側の記録「特高月報」を調査。植洙さんが、1942(昭和17)

年5月に検挙されていたことが分かる記述をみつけ、コピーを送った。棟河さんがこの資料を添え、再申請したところ今年3月に認められたという。

同ゼミは、「思慕月報」といった当時の他の記録も調査。韓国・済州島出身者で、戦中に東京で共産主義の活動をしていった人物の裁判記録を確認し、濃度(濃度)に記録を渡した。

韓多ゼミ顧問の山下正寿さん(63)は「ほとんどの人が記録がないため認定されないが、日本側の資料には朝鮮人の労働運動の資料が多く、役立つのではないかと期待している。熊谷大の田中安教授(日本アジア関係史)は『外国人が日本側の資料にアクセスするのは難しい。日韓の交流が盛んになればこういう運動も広がるのではないかと話している』」

VI. 編集後記(お礼に代えて)

8月2日～4日に実施した、日韓交流と津賀ダム平和祈念碑10周年式典は大成功で終わることができました。皆様のご支援とご協力の賜だと思います。ありがとうございました。

なかでも、韓国の皆様は政府間の対立が泥沼化する中、釜山そして小倉から鉄道ではるばると幡多まで来てくれました。日本の高校生や地域の人たちと楽しくも充実した交流を実現し、韓国高校生の歌って踊る「アリラン」が式典を大いに盛り上げてくれました。引率のぺ先生は「10年前は犠牲者の悲しみと供養の思いが主だったが、もう10年経ちました。元気の出る『アリラン』を生徒と考えました。」この言葉が今年の式典を位置づけてくれました。

四万十町は中尾町長さんのメッセージをはじめ、式典の準備やテントの設営、更にマイクロバスを提供、大正地域振興局局長・山本さん自ら運転、日韓高校生や教員を2日間送迎してくれました。国際交流員のキム・ヘミンさんはアドリブも含めて流暢な通訳をしてくれました。四万十町人権共闘の皆さんは実行委員会や諸準備にお骨折りいただきました。

地元・下道地区の方々とは会場整備や後片付け、下道集会所を宿舎として実費で提供して下さり、永年無名墓の供養を続けて来られた中平さんのあいさつが心に残りました。

在日本大韓民国民団高知県地方本部の方々とは、毎年慰霊祭を行ってくれています。碑前に、立派な花束と駐広島大韓民国総領事・金宣杓様の花輪が飾られ、パク・スイル議長は「韓日の民間努力で今日の式典を実現でき、心から感謝したい」とあいさつを述べてくれました。

そして、在日コリアン協会の方々も総会で決議し参加してくれました。

また、多くの方から寄せられた善意のカンパは韓国の方々の滞在費や交流、式典の運営に活用させていただきました。資金難の中、助かりました。

幡多ゼミOBの村井さんは、あいさつで「韓国高校生と草の根の交流を図る事で、歴史の傷跡をこれからの私たちの未来を共に作ろうという、強い絆に変えてきました。」と自らの経験を語りました。又、津賀ダム平和祈念碑建設当時の中心メンバーの一人、弘田君のメッセージを紹介します。彼は碑に使っているダム工事の石を何度も拾いにきたり、碑前のお地藏様を2週間かけて昼休みや放課後にガンガン掘った人物です。「忙しくて参加できないのが残念です。現役ゼミ生にお伝えください。私自身の環境や日韓の環境は大きく変化しましたが、12年前の日韓交流のつながりは私たちの間では今も変わらず続いています。このつながりを大切に交流を楽しんでください。」

なお、幡多高校生ゼミナールの高校生は2日間の日韓交流で、初対面の韓国高校生とすぐ打ち解けることができました。ハングル、英語、ジェスチュアをとり混ぜ、活発に親睦を深める姿は我々顧問に安心と確信を感じさせました。日韓高校生の間では会って話せば理解できると未来への手応えが広がっています。

式典には地域外の方々も含め、60名近くの参加者で盛大な祭典となりました。津賀ダム平和祈念碑の建設や10周年記念式典を通じて、様々な人と人との繋がり、絆が広く、深く、強くなっていくことを感じています。

本当にありがとうございました。

2019年8月 幡多高校生ゼミナール顧問会

- ・ 報告集を希望の方は300円（何冊でも送料200円）です。
- ・ 幡多高校生ゼミナールHP、太平洋核被災支援センターHPをご覧ください。この報告集も掲載しています。

・ 連絡先：幡多高校生ゼミナール 顧問事務局
〒787-0051 高知県市四万十市具同田黒 1-10-8
Tel・fax 0880-37-3833 上岡橋平
メール kamiokakyouhei@agate.plala.or.jp